

玉ちゃんの一年

大阪 芙蓉 峯

世に事實ほど貴重にして且つ趣味深いものはないといふことは、此の一篇を讀むもの、皆今更に感ずる處だと思ひます。愛すべき玉ちゃんの風貌が、あり／＼と目に見えて來ます。また、此の可憐なる幼児のために興へられて居る眞卒なる同情と、細心なる注意との氣分が、誇張なく眩飾なき筆端から、吾々の胸へ沁々と漂ふて來ます。そして此の種の幼児教育に就て、いろ／＼のことを教へます。勿論多數の保姆諸君の中には、此のたぐいの經驗は必ずしも非常に特別の場合でないかも知れません。併し事實の實さは、それが事實であるからとは限りません。事實はすべてありのまゝに貴いのであります。そして理屈よりも、議論よりも色々のことを考へさせるのであります（編者）

四月の六日に入園式をした玉ちゃんは満四年三ヶ月で四十名の同年輩の男女兒と共に新入兒となつた。其母は發達の遅れて居る事を繰返し繰返し頼んだ。其原因としては腦病を患へたのでもなく、近親結婚の爲でも無い様子。たゞ家が商業で多忙だから子守に任せて置いたとの事、其間に何か原因する所があつたのであろう。

四月八日。母「あーいちやい、あーいちやい」保「あらどうなすつた、瘤が出てまあ痛いでしょ友」玉ちゃんね、ピアノに、ぶつかつたの」保「ピアノで」

そしですか、玉ちゃんは幼稚園のかつてが、まだ分りませんから、ピアノが見えなかつたのでしょ」と云つたが、この大きなものが見えないとは、餘程遅れた兒だと思つた。それから幼稚園の中を連れて廻つて馴れさせた。

四月十五日。友「先生玉ちゃんが池へ……早く来て頂戴」、今迄傍に居つたのにと思つて、馳けて行くと淺い池だから足許丈だが濡れて、ぼんやり立つて居る 保「玉ちゃん冷たいでしょ着物を着かへて上げますよ」と云つて、幼稚園のものと取り

替へた。それから日課の様に毎日毎日園内をつれて巡つた。

五月二日。共同遊戯をした。他の幼児は最早列をして歩く事に馴れ、ピアノの音で行進するが、玉ちやんはすぐ獨りで、ふら／＼と横に出る。友「あら又玉ちやん、あんな所へ」保「それではね玉ちやん、一番先きにいらつしやい、そして先生とお手をつないで汽車のかまになりませう」と連れて來た。

五月七日。玉汽車が通る煙を出して（唱歌の一節）……先生汽車が出來ます」。

保「玉ちやんはお歌が上手ね。おや／＼板排への汽車が出來ましたね。あら煙出しが下向きですね」。友「玉ちやんの汽車は水に寫つた所ですか」と少し發達のよき兒が尋ねた。保「そーでしよ」と答へたが玉ちやんは何によらず轉倒して作るのが常であつた。先生は其時にいつも横型か實物かを觀察せしめるのをつとめて居た。

五月十七日。保「玉ちやん、オルガンが何を歌ふか聞いて、ごらんなさいよ」玉「は」と保「そーです。その次は」玉「君が代」保「それではね玉ちやん、お目をくくつてお手の鳴る人を捕つかまへてごらんない」友「玉ちやん／＼ボン／＼／＼」玉ちやん立つた儘動かない。この聽覺練習見事失敗した。

五月二十一日。保「花ちやんも春ちやんも、玉ちやんを仲間に入れて遊んで頂戴」友甲「だつて先生玉ちやんと遊ぶと、つまらないんですもの」友乙「玉ちやんいらつしやい飯事しますから。あなた猫におなりなさい」。暫くして猫は捨てられて、ぼんやり空氣見物をして居る。保「玉ちやん、先生と砂屋事しませうね。玉ちやん買ひにいらつしやい／＼」友甲「先生私も寄せて頂戴」。友乙「私も先生」保「玉ちやんにお頼みなさい」。友「玉ちやん寄せて頂戴」。保「ぢやあね、これから、あなた方のお遊びにも玉ちやんを寄せて頂戴よ。」かくして玉ちやんの價値を少しづつ上げる。幼児も「私、玉ちやん好き

よしと云ふ様になつて次第に友が出来た。

六月中旬。この頃から餘り物に突當る事がなく、外遊びも友に引廻され、入園當初に比べて餘程快活になつた。家庭の方からも食事のすゝむだ事、身體の壯健になつた事等について禮を云つて來た。

こちらからも草履の注意だとか、表店の繁雜な所よりも祖父母の住んでる靜かな隱居家の方が爲によいと二三の打合せをした。

六月下旬。玉ちゃんの體格検査をした。入園當初に比すると他はあまり差がなかつたが、胸圍と重量が著しく増した。

七月二日。身體の方は丹誠の効が有つたが精神の方はあまり以前と異なる所がない。入園後三ヶ月になるに自分の室も席も分らない。友「先生玉ちゃんを連れて來ました」。保「はばかり様。玉ちゃん、お机に赤い紙を貼つて置きましたから探してご覧なさい」。玉「ここ」保「いいえ」。二三度迷つて漸く赤の見別がついた。それから餘り席を忘れる

事がなくなつた。保姆はもつれた糸の端を見付けた様に喜こんだ。

七月六日。赤を知つてから五日目に青紙と取替へて試したが失敗に終つた。この後夏休み迄は氣候の爲か心身とも少しも進歩を見なかつたが、しかし自分の室と席は間違へず確に理解が出来た。

九月一日。家庭へ注意した爲時々涼しい所へ連れて行つたと見え、元氣よく九月一日から來た。

友「玉ちゃんねお部屋が分らないつて泣いてるわ」保「あら、そうですか、玉ちゃんここですよ」。嗚呼三十日の休み中に切角丹誠して緒を見出した教育の手が、りは元の有様となつて居た。加ふるに口は締りなく開き、客貌さへも舊に復して居た。

これを見た保姆の落膽は如何ばかりであろう。胸も迫まつて言葉も出ず。ただ顔打まもつて居つた。しかし又一方から考へると室が知れないとて泣くだけ感情の方が發達したのではあるまいかと、自ら慰めて、玉ちゃんを抱きしめた。

九月十九日。保「どなたか一人でお歌を歌つてご覧なさい」。玉「私歌ひます。鳩ポツポ」友「先生玉ちやんはお歌が上手ね」。實際不思議に唱歌のみは勝れて巧であつた。聲も清らかなれば拍子も正しく、歌詞も誤りが少ない。だから玉ちやんはこれで名譽を維持して居るのである。

九月二十四日。今日は玉ちやん石盤に何かしきりに畫いて居る。保「玉ちやん何が出來ました」

玉「山と花」と云ふが、其の實たゞ線ばかりで山にも花にも見えない。けれども本人は興に乗じて何か歌ひつゝ頻りに畫いて居たが、ふと見ると腰掛の下が變に濡れて來た。(便を外したのである)

保「玉ちやん一寸」と抱いて他の室へ行き着替させた。かゝる事は從來數回あつたのであるが、其日は非常に羞んで、しよびて居た。次第に感情的の方面が發達して來たので有ろうと愈々楽しみになつた。

十月三十日。玉ちやんは積木で遊んで居た。積

んでは倒し排べては突き、玩んで居たが。玉「先生人形貸して頂戴」。保「取つていらつしやい」と云ひながら見て居つた。玉ちやんは、頻りに人形を選つて居る。選擇の能力が出來たかと尙見て居ると、不規律に排べた木の上を人形に歩ませて居る。

保「玉ちやんそれは何ですか」。玉「は、し」。保「其橋もよいけれど、水の流れる所がありませんからこんなにしてご覧なさい。そら水も流れるでしよう人形様も渡りますね」と簡単な橋を教へてやると、さも満足した様に、笑つて居つたが、友が外遊びに出てても玉ちやんは橋と人形とを玩んで居た。其後はいつとも積木で遊べば橋と人形で少しも變化がない。これに對して保母は多く他のことを教へずたゞ興味の趣くままに少しづつ指導して居た。

十一月十五日。玉「砂糖を買ひにいらつしやい」。先生砂糖買つて頂戴。保「よいお砂糖ですね。頂きませう。お直段おいくらです」。玉「三錢」。保「さー三錢お拂しますよ」と石を一つか

み渡すと變な顔をしたが暫くして三個の石を取つて残りを保母に返した。この時程意外に思つた事はない。他の幼兒と同じく感覺練習的の事や數に關した遊びを共にされて居つたが三錢で三個の石を取る程發達して居つた事に氣がつかなかつた。勿論三錢で三個に限つた事ではないが、とにかく

玉ちやんは三と云ふ數を知つたのである。この頃から著しく精神が發達して來た。簡單な手技等はよく反復説明して知らずれば人手を貸らず作り上げる事が出來た。但し他の幼兒に比べれば三倍の時間が必要である。

十二月三日。保「玉ちやんこの箱を皆さんに配つて下さい」。ふと用事を命じた。玉ちやんは、さも満足したらしい笑を見せて、しきりに運んで居つた。無論完全に配れないが、先生の用事を手傳ふのを餘程名譽に思つたので有う。其からは又しても保母の傍へ來て、御用させて頂戴と云つて、獵犬が主人の様子を見る様な容貌をして待つて居る。

實は却て不便だが此の望みに輝く顔色に對しては種々の用事をさせずには置かれなかつた。これが爲に自然的に種々の方面の經驗を増して、非常に心身の發達を進めた、保母は骨の折れない、しかも、彼れを充分満足せしめて、好成績を得る良法を偶然見出したのを喜こんだ。

一月二十日。砂場の方で幼ない泣聲が聞えた。保母が近づいて見ると玉ちやんは、二つ位の赤ん坊を、小さな手に抱へ上げ一生懸命の力を出して歩いて居る。否むしろ引きづゝて居る。玉「先生この人お母さん居ません」。泣いて居る幼兒は園兒ではない。どうやら外部から母の傍を離れて遊びに來たが興盡きて母を思ひ出して泣いて居るらしい。全體玉ちやんは、これ迄感情の方面にも餘程發達が遅いと思つて居たのに、斯く高尚な同情の萌を現はすとは案外であつた。保「玉ちやんは赤ちやんの泣いた時、どんなに思ひましたのですか」。玉ちやんは何も云はず只だ笑つて居る。保「可愛想

に思つたのですか」。玉ちやんは、うなづいた。保「善い事をなさつたね。先生だつて可愛想に思ひましたよ」。用事を命ずる方法を執つてから先生に親しむ事が一通りでない。従つて先生も同感だと云ふ事は、彼の兒にとつて、千萬の賞言よりも嬉しうであつた。

二月十二日。玉ちやんの父が來られた。其言によると家庭でも、心身の發達が次第に著しく見え來た。そして先生を恭ふ事、先生の言動を眞似

小兒の傳染病

△傳染病とは何を指すか

傳染病といふのは、字が現す通り、うつる病氣であつて、その中に急性のものと、慢性のものとあります。急性の方は所謂流行病で、コレラ、チフス、猩紅熱等、却ち八大傳染病と云はれて居る

る事等、噴出しそうな事實迄を加へ話して其骨折りを謝した。保母は其父に今迄自分のとつた教育の方法、即なるべく精神に刺激を與へずに、氣長く習慣をつけた事、神經系統を特に養護した事、絶えず體格検査を保母自らした事、少し發達した所で感覺練習的事をした事、又偶然に良方法を見出した事、度々失敗した事等を語り、其父に満足せらるゝは金鵝勳章を拜した様である事をつけ加へて、尙今後の打合せをして別れた。

醫學士 石 塚 保 吉

類であります。慢性の方で最も有名なのは結核梅毒等であります。

△恐るべき細菌

傳染病はどうして起るかといふと、御存じの通り細菌の爲めに起るのであります。我々の肉眼